

Title	『傾情山姥都歳玉』考
Author	名和 久仁子
Citation	都市文化研究. 3 卷, p.52-66.
Issue Date	2004-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科 : 都市文化研究センター
Description	

Placed on: 大阪市立大学

『傾情山姥都歳玉』考

名 和 久仁子

要 旨

『傾情山姥都歳玉』は江戸辰松座で上演された作品である。これは大坂豊竹座の座付作者紀海音の作『新百人一首』を改作した作品とされているもので、辰松座の人形遣い辰松幸助による加筆と思われる。本稿では辰松幸助が海音作をどのように改変して江戸に採り入れたかを探るとともに、紀海音作『新百人一首』の先行作と言われている京宇治座の『三井寺不動明王豊年護摩』にも目を配り、あらためて海音作との先後関係にも踏み込んで考察してみた。その結果、現存する『新百人一首』や『三井寺不動明王豊年護摩』に先行する紀海音の原作が存在した可能性を引き出すに至った。また考察の過程で行った三本の比較により、近世中期の浄瑠璃界において、一つの作品が京・大坂・江戸の三都でそれぞれどのように改変され、正本が上梓されたかを知る手がかりを得ることができたように思う。

キーワード：江戸辰松座、大坂豊竹座、京宇治座、紀海音、辰松幸助

はじめに

『傾情山姥都歳玉』は、紀海音作『新百人一首』を改作したとされる作品である。江戸辰松座の人形遣い辰松幸助の手になると思われる改変部分の特色を、両作を比較する事から導き出し、さらに従前より問題となっている『三井寺不動明王豊年護摩』と『新百人一首』との関係について考察し、上方豊竹座の海音作品が江戸辰松座で上演された背景を探ってみたいと思う。

1. 書誌的事項

まず本稿で考察する三本について、書誌的事項を記しておく。

一、『傾情山姥都歳玉』

大阪府立中之島図書館蔵

書型 半紙本一冊 寸法（縦二〇・九糎×横一五・五糎）

題簽 傾情山姥都歳玉

内題 傾情山姥都歳玉 第一

行・丁数 十四行三十四丁

板心 上方に「山うは」、下方に丁付

丁付 一～九、十ノ十一、十二～三十五

序 竹本喜世太夫・堺嶋太夫・竹本浅太夫・同半太夫

版元 さがみや与兵衛

二、『新百人一首』

東京大学文学部国語研究室蔵

（『紀海音全集』二 所収）

書型 半紙本一冊 寸法（縦二二・三糎×横一六・〇糎）

『傾情山姥都歳玉』考（名和）

題簽 新百人一首（後補）
内題 新百人一首 豊竹上野少掾直伝
行・丁数 六・七行九十丁（一オ～三ウ 六行）
板心 上方に「百」、下方に丁付
丁付 一～九十
奥書 豊竹上野少掾・紀海音
版元 正本屋西沢九左衛門版

三. 『三井寺不動明王豊年護摩』

国立国会図書館蔵

（『古浄瑠璃正本集・加賀掾編』所収）

書型 半紙本一冊 寸法（縦二二・二糰×横一六・二糰）

題簽 三井寺 豊年護摩 太夫
不動明王 直之正本

内題 三井寺不動明王豊年護摩 正本

行・丁数 八行五十八丁

板心 中之巻冒頭丁に⊕

丁付 板外中央に不動一, ふとう二…
ふとう四十一, こま一…こま十七と
ある

奥書 加賀掾

版元 山本九兵衛

り,それはおそらく正本に作者名を記している次のような例から考えて, 祐田善雄氏が論文「当流義太夫節の江戸進出¹⁾」において指摘された通り, 座本辰松八郎兵衛の弟で人形遣いの幸助の手になるものと思われる。

○享保四(1719)年八月 辰松座

『八百屋お七江戸紫』 堺島太夫・竹本喜世太夫・竹本茂太夫・竹本半太夫・竹本浅太夫・手妻太夫辰松八郎兵衛座。

さがみや与兵衛版九行本。本文末に「手妻太夫辰松八郎兵衛座・辰松幸助・辰松三十郎・作者紀の海音・辰松幸助」の連名がある。

○享保七(1722)年六月 辰松座

『半兵衛おちよ 心中二つ腹帯』 番付あり。伊賀屋勘右衛門版八・九・十行本の内題下に「作者 記海音 辰松幸介^(ママ)」。

○享保十四(1729)年正月 辰松座

『愛護若都の富士』 七行本。作者辰松幸助(内題下)

*紀海音作『愛護若都箱』を踏まえた作。

そこで『新百人一首』と『傾情山姥都歳玉』のプロットを比較して, 辰松幸助の加筆の意図を探り, 問題点を導き出すことにする。

2. 辰松幸助による加筆

『傾情山姥都歳玉』は, 享保四年(1719)の江戸辰松座創設以後, 『八百屋お七江戸紫』『西行法師墨染桜』『心中二つ腹帯』といった豊竹座系統の曲目が相次いで上演された中の一つであると考えられている。旗上げ間もない辰松座の陣容を見ると, 豊竹座で活躍した経験のある太夫や人形遣いが多数居並ぶことから, こうした演目が続くことは頷けるのだが, 豊竹座の外題をほぼそのまま用いる三作に比して, 『傾情山姥都歳玉』という外題は, 豊竹座の『新百人一首』からは連想しがたい。もっとも, 『新百人一首』という海音作の外題自体が筋そのものにはあまり関係が無く, 巻末に定家卿追善の「歌の巻」を添えたことのみ由来しているので, これはむしろ豊竹座側の外題のありように何らかの問題を孕んでいるためかもしれない。

辰松座上演の演目は上方の一般的な上演形態である五段物を江戸の上演形態である六段に改変するに伴い, 多少なりとも加筆されてお

3. 構成対照表

以下の構成対照表は, 『新百人一首』と先後関係が問題となる, 宇治座の『三井寺不動明王豊年護摩』をも含めた三本を並べてプロットをまとめたものである。上段『三井寺不動明王豊年護摩』のプロットを丸数字で示し, 他の二作におけるそれと同様のプロットは同じ記号で表した。また, 中段『新百人一首』に独自のプロットは括弧付き数字で表し, 下段『傾情山姥都歳玉』におけるこれと同様のプロットには同じ記号を使った。さらに『傾情山姥都歳玉』に独自のプロットは●印で表した。

『新百人一首』と『傾情山姥都歳玉』とは, 用字に違いはあるものの, プロットが同じ部分の本文はほぼ同文であり, 節付けもほぼ同じである。

▼構成対照表

『三井寺不動明王豊年護摩』	『新百人一首』	『傾情山姥都歳玉』
<p>[上之巻]</p> <p>序 美濃国雲井之丞城の段 <small>(ラ、そりや大名のヲお通りじや。さきのけへ。よ いやさ。ぶんぶく茶がまに毛がはへた。…)</small></p> <p>①うどんそば売りのうそ内が鳥毛奴の出で立ちで鐘を 振り歩く。</p> <p>②城に呼び込まれたうそ内は、後室と伴蔵から、若君 を懐胎し身請けされた島原の傾城金山の殺害を強要 される。</p> <p>③うそ内は金山の首を絞めかかるが、妹と判明して近 況を聞き、親の敵の名が知れたので悦べと話す。金 山は犬雲井之丞が敵であると知り自害しようとする が、兄に制せられ、共に敵を討とうという折に後室 伴蔵の家来に取り巻かれ危ういところを逃げ落ち る。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 雲井之丞に奥様はいない * 金山の子は「今俄に生れもせまい」 * 親浅井新六の討たれた経緯 * 傾城奉公の経緯 * 雲井之丞に敵の話をした * 金山の幼名はお菊という * 兄弟共に豊外明神の守を持っている * 母はおとし心労から病つき死んだ * 兄新八は養子となっていたが、実父の討たれたを 知り、博多の養父に理を立てて敵を尋ね歩いてた * 春霞雲井之丞の以前の名は若林力太郎 <p>中 逢坂山の段 <small>(春霞雲井之丞は、禁番の首尾能勤入国の御乗物ぼ つ立ろ。…)</small></p> <p>④勤番を終えた雲井之丞が入国の途次逢坂山で休息し ていると金山が駕籠でやってくる。</p> <p>⑤所望されて金山が舞を披露する。</p> <p>⑥面白可笑しい口上をととなえながら飴売りにやつした 新八が若君を背にやってくる。</p> <p>⑦新八が雲井之丞に討ってかかり敵討ちの仔細を話す うち、先に現われたのは若君を産んで間もなく死ん だ金山の亡霊であったことがわかる。</p> <p>⑧やがて新八の真の敵は伴蔵であるとわかり、後室と 伴蔵伴内父子の陰謀が露呈し、一味に取り巻かれる 所へ左京の進が駆け付けて応戦する。新八は若君を 左京に預け雲井之丞の行方を捜しに行く</p> <p>切 三井寺の段 <small>(雲井之丞は左京の進新八が働き故。あやうきかこ みはのがれ給へど猶しもまさるうき思ひ。…)</small></p> <p>⑨雲井之丞が三井寺の知覚阿闍梨に匿われるところへ 追手が押し寄せるが不動明王の奇瑞に守られる。</p>	<p>[第一]</p> <p>序 美濃国雲井之丞城の段 <small>(陶弘景が曰。菊酒は不祥を辟。菊囊は枕として目 をあきらかにす。…)</small></p> <p>「菊合せ」<small>(さればいにしへ。百菊の。詩有歌有年々 の。実ばへに匂ふ色品の。…)</small></p> <p>(1)雲井之丞御勤番の留守の城では菊作りの種介が名花 を咲かせ褒美を貰う。</p> <p>②城に呼び込まれた種介は、後室と伴蔵から、若君を懐 胎し身請けされた柴屋町の傾城金山の殺害を強要さ れる。</p> <p>③種介は金山の首を絞めかかるが、妹と判明して、親 の敵の名が知れたので悦べと話す。金山は雲井之丞が敵 であると知り自害しようとするが、兄に制せられ、共 に敵を討とうという折に後室伴蔵の家来に取り巻か れ危ういところを逃げ落ちる。</p> <ul style="list-style-type: none"> * (雲井之丞の奥様はちとせの前) * 母は新八が親の敵を討ったという吉報を待ち暮ら している * 春霞雲井之丞の以前の名は若林力太郎 <p>切 逢坂山の段 <small>(初雪は。空にふれ共春霞。雲井之丞は勤番の。首 尾よく勤入国の御乗物ぼつたてろ。…)</small></p> <p>④ [同左]</p> <p>⑦ [同左]</p> <p>⑧ [同左]</p> <p>[第二]</p> <p>口「ちとせの前道行」 <small>(心まよはず。心こそ。心おろかな心から欲と悪と の二筋に。あかれぬ中を引わけて。…)</small></p> <p>(2)ちとせの前は与茂太郎を供に夫の帰依する阿闍梨の いる小倉山二尊院へ行く。</p> <p>跡 小倉山二尊院の段 <small>(与茂太郎あたりを見まはして。是ぞ尋る御寺也い ざせ給へ去ながら。…)</small></p>	<p>[第一]</p> <p>序 美濃国雲井之丞城の段 <small>(どうこうけいはいわく。菊酒はふじやうをさり。 きくのうは枕としてめをあきらかにす。…)</small></p> <p>(1) [同左]</p> <p>② [同左]</p> <p>③種介は金山の首を絞めかかるが、妹と判明して、親 の敵の名が知れたので悦べと話す。金山は雲井之丞 が敵であると知り自害しようとするが、兄に制せら れ、共に敵を討とうという折に後室伴蔵の家来に取り 巻かれる。折も折金山が産気づき危ういところを 逃げ落ちる。</p> <ul style="list-style-type: none"> * (雲井之丞の奥様はちとせの前) * 母は新八が親の敵を討ったという吉報を待ち暮 らすうち案じ煩って死んだと、妹の浮橋が知らせ てきた * 春霞雲井之丞の以前の名は高嶋力太郎 * 金山、出産する <p>切 逢坂山の段 <small>(初雪は。空にふれども春霞。雲い之丞はぎん番の。 首尾よく勤入国の御乗物ぼつたてろ。…)</small></p> <p>④ [同左]</p> <p>⑦ [同左]</p> <p>⑧ [同左]</p> <p>●伴内は家を納める巻物は我が手にと得意になるが、 左京は偽物と嘲笑い本物はここにあると見せる。驚 いた伴内は逃すなど勢を寄せるが左京は投げ散らし て追い払う。</p> <p>[第二]</p> <p>口「ちとせの前道行」 <small>(心まよはず。心こそ。心おろかな心から欲と悪と の二筋に。あかれぬ中を引わけて。…)</small></p> <p>(2) [同左]</p> <p>跡 小倉山二尊院の段 <small>(よも太郎あたりをみ廻して。是ぞ尋る御寺也 いざさせ給へ去ながら。…)</small></p>

(注) へはおどり字を表す(以下同じ)。

『傾情山姥都歳玉』考（名和）

<p>中之巻 京都代官所の段 (されば堯に敢諫のつゞみあり。舜に誹謗の木有是皆民をあらたにするの術。…) ⑩小川帯刀は京都代官所で恩有る左京の妻に会う。伴蔵の悪逆を聞いた帯刀は、伴蔵に詰寄り白状させて引立てる。</p>	<p>(3)追手に寄せられ逃げ二人は路銀のあてもなく困惑するが、与茂太郎の才覚で田楽売りと酔漢から金を奪い逃げ行く。</p> <p>第三 口 両六原玄関先の段 (堯に敢諫の鼓有舜に誹謗の木有も。是聖代の時津風吹なびきたる世々の道。…) ⑩小川帯刀は両六原玄関先で恩有る左京の妻に会う。伴蔵の悪逆を聞いた帯刀は、伴蔵に詰寄り白状させて引立てる。</p> <p>切 高富丹下住居の段 (関のお地蔵は親よりましじや。にあい^{ナラス}の妻たもる。…) (4)与茂太郎はちとせの前を父高富丹下の家に匿っている。そこへ伴内の家来横柴武平太が来て丹下に帰参を求め金子百両を差し出す。喜ぶ丹下と与茂太郎は罵り</p>	<p>(3) [同左]</p> <p>第三 口 両六原玄関先の段 (堯に敢諫の鼓有舜に誹謗の木有も是聖代の時津風吹なびきたる世々の道。…) ⑩ [同左]</p> <p>切「山めぐりの段」 (一洞むなしき谷の声。山たかふして海ちかく雪ふる空に風重き。…) ●左京の進は殿の行方を尋ねて独り山路を踏み迷い行暮れて賤女に宿を借る。左京は自分の名や素性を女が知っている事に不審をなす。女は金山の一念が此土にとどまり山姥となって山廻りをするのであると明かし踊り狂いながら姿を消す。</p> <p>第四 廓の段 (くるは住居は時雨の雨よ。ふつつふられつむらへさめの。…) ●揚屋喜左エ門が太夫浮橋様のお出が遅いとせかすところへ黒木売りの女がやって来る。浮橋の所望で女は大原の里の名所を語り、今宵はここに泊まっていけと喜左エ門に伴われ奥に入る。 ●鏡とぎに身をやつす雲井の丞は侍と呼ばれ、美濃国高嶋の家宝、定家卿の小倉山の歌の直筆を上句と下句それぞれに彫り付けた二面の鏡を探し出すよう頼まれる。雲井の丞がどうしたものかと思案するところへ廻国尼姿のかるもがやって来る。かるもはかつて雲井の丞馴染みの傾城であったが姉女郎金山の懐胎を機に退いて出家し清林と名を改めたと話す。先程の侍の言いつけで雲井の丞は清林とともにここに泊まることになり蒲団一条と屏風を借りる。 ●二人が寝つかれぬところへ二階より浮橋が下りてきて鏡とぎを呼び、家宝の鏡が見つかって申し出るなどいう。雲井の丞は一物あると思いつつわざとばげ、褒美を貰って遊んで暮らすのが極楽と答える。思い詰めた浮橋は、鏡とぎを酔いつぶし、焼いた火箸で喉を突き通し殺そうとするが、清林に間夫狂いと間違われ口論となる。清林が漸く寝た後、浮橋が雲井の丞を殺さんとするとところに金山の死霊が現われて討たせはせじと突き放す。はずみで倒れた屏風の中から遊女姿の清林の生霊が現われ、三人に取り巻かれた雲井の丞は茫然と立つ。やがて死霊生霊が消え、鏡とぎが雲井の丞であると知った浮橋は、姉金山から預った家宝の鏡を出し、雲井の丞の一面と合わせる。浮橋は雲井の丞に促されて二階で寝入っている伴蔵の家来藤九郎を討つ。追手から逃れて這い出したところに黒木売り姿の金山の霊が現われて、雲井の丞、浮橋、清林を柴の内に隠して軽々と担ぎ行く。</p> <p>第五 高富丹下住居の段 (関のお地蔵は親よりましじや。にあい^{ナラス}の妻たもる。…) (4) [同左]</p>
--	--	--

<p>[下之巻]「翠夢の浮橋<small>海春浮世咄</small>」</p> <p>口 三井寺の段 <small>(出る日の雲井之丞は金山のわかれの涙ぼだい心。とても此世は火宅也…)</small></p> <p>①有髪の僧として正覚と法名し学問に励む雲井之丞が気晴らしに景色を眺めていると小児達が遠眼鏡を差し出し八景を語る。 ②遠眼鏡を見廻すうち雲井之丞は柴屋町の傾城浮橋に心を奪われる。 ③御寺に帰った雲井之丞は煩惱を晴らすために祈るが、不動明王の顔が浮橋に見え、廊に走り行く。</p> <p>中 傾城夢の浮橋より三井寺の段 <small>(今の世ときにくすんだ人は。あたら浮世に。くらしぞんうきをはらすは色ざと。たき付られて柴屋町。…)</small></p> <p>④廊内で雲井之丞が今熊野海春と名を替え万病円売りの辻談義をしているところへ浮橋が現われる。雲井の丞は泣いて口説き飛びかかろうとするが禿遣手に引き止められ、気がつくると三井寺の護摩堂に座していた。 ⑤そこへ新八と左京の進が来て、不動明王の霊夢による再会を喜ぶ。知覚は雲井の丞に左京の妻と帯刀の働きで伴蔵父子が津の国へ逃げ下ったことを語り、悪人を滅ぼし美濃の国主に戻るよう促す</p> <p>切 「左京がつま風景ふなぢの道行」 <small>(おし鳥の。妻にわかれし思ひ羽の。思ひ重る中々に。夫左京は秋忠の。…)</small></p> <p>⑥夫左京が河内へ向かうと聞いた妻は、若君を伴い豊後橋より八軒屋まで舟で下る。伴蔵父子が駆け来るところを雲井主従が捕え、新八が敵討ちを遂げて大団円となる。</p>	<p>勘当される。立ち退こうとする二人に丹下が待てというを聞き与茂太郎は思い余って切り伏せる。丹下は今わの際に、先程の百両を路銀に殿を探し、主の為に親まで殺した忠義の侍として知行を取れと遺言する。</p> <p>第四 口 小倉山草庵の段 <small>(菩提もとうへ木にあらず。花ならず木のはしと身を持たして。…)</small></p> <p>①有髪の僧として正覚と法名し学問に励む雲井之丞が二人の児を遊び相手に招き入れると、児は乳母から貰った遠眼鏡を差し出す。 ②遠眼鏡を見廻すうち雲井之丞は金山に生き写しの島原の傾城浮橋に心を奪われる。 ③見たちが御寺に帰った後、雲井之丞は煩惱を晴らすため不動明王に祈るが、たまたま廊にうかれ行く。</p> <p>切 傾城夢の浮橋より小倉山草庵の段 <small>(我宿は。都のまにし島原や。世を浮橋と人はいふ。其身はいろの日の出にて。…)</small></p> <p>④廊内で雲井之丞が今熊野海春と名を替え万病円売りの辻談義をしているところへ浮橋が現われる。雲井の丞は泣いて口説き抱きつこうとするが遣手に突き倒され、気がつくとも草庵の護摩壇に座していた。 ⑤そこへ左京夫婦、帯刀、新八が若君を連れ、伴蔵父子を縛ってやって来る。雲井の丞は新八に敵討ちを遂げさせる。</p> <p>第五 雲井之丞城内の段 <small>(天物いわずあきらか也とは今此時ぞくもりなき武門の鏡照渡る雲井の丞秋忠は。…)</small></p> <p>(5)帰城した雲井の丞は、先祖道家の命日の追善に百人一首の心を語り聞かすべく広間に出る。</p> <p>「歌の巻」 <small>(敷島の。筆の林に遊ぶ人。高き賤しきなぞへなく。書て覚て口のはに。…)</small></p> <p>(6)雲井の丞は二条家の秘伝を語り伝える。</p>	<p>●丹下死すところへ武平太が約束の姫受け取りに来たと入り来り、よも太郎は親の敵と討ち取る。そこへ左京の進が人々を伴い来て再会を喜び、これより帰国して伴蔵父子の首を刎ね御家を納めんと出立する。</p> <p>第六 雲井之丞城内の段 <small>(天物いわず明らか也とは今此時ぞくもりなき武門の鏡てり渡る。雲井之丞秋忠は。…)</small></p> <p>●帰城した雲井の丞の前に左京の進が伴蔵父子を縛って出し、新八がめでたく敵討ちを果たして一同悦ぶ。丁度若君の髪置のため皆々白髭明神に参詣する。</p> <p>「かみ置のだん」 <small>(神ど君か代。すぐなれば。うこかぬ国と治りて。弓やのめくはうかゝやけり。…)</small></p> <p>●雲井の丞の若君は三才の髪置のため白髭明神に参詣する。神前に着くと御神は巫女にのりうつり神託が有る。一同有り難く礼拝の後帰館し、御代万歳とめでたく治まる。</p>
--	---	--

4. 『新百人一首』と『傾情山姥都歳玉』の相違点

構成対照表より『新百人一首』と『傾情山姥都歳玉』の相違点をまとめると次の通りである。

(ア) 「第一」の序に『新百人一首』では「菊合せ」があるが、『傾情山姥都歳玉』にはない。

(イ) 『新百人一首』における「第一」序の末（プロット番号③）には金山と兄新八が敵の囲みを危うく逃れる場面が、『傾情山姥都歳玉』では、

…すきをうかゞい金山が手を取て欠出れば。ア、是きつふくるしいとなやみふせは新八も。エ、ふがないしま愛で。ときも時折もおり。うろたへたかいもふとゝ。又ひつたてんとする所へ敵の大勢寄せ来る。心へたりと無二む三。切たつればこらへずし。四方へばつと逃ちつたり。立帰り引おこせば。なむ三宝こはいかに此月がうみ月の。けがついたのかと指寄て。こしをかゝへて力をつけ。女の大事じやしんぼうじや。しきりがくるぞうんといへ。うんといへといふ内に。またのがすなと欠来る。新八ほうどあくみはて。さつてもへいそがしや。さんのひもとく首を取。初声もしきりにきて。切ちらすやら腰だくやら。ういざんせかさん金山が身の行すへぞ三重急ける…

と、逃れるさなかに産気づいた金山が出産することになっている。

また、敵と判明した春霞雲井之丞の前名が、『新百人一首』では「若林力太郎」であるところ、『傾情山姥都歳玉』では「高鳴力太郎」となっている点、さらに以下に示す通り、金山と新八の母は『新百人一首』では敵討ちの吉報を待ち暮らしているとなっているが、『傾情山姥都歳玉』では吉報を待ち暮らすうち案じ煩い死んだと妹の浮橋が知らせてきたとなっている点に違いがある。

〔『新百人一首』
〔『傾情山姥都歳玉』

〔おいとしや母様よりくるたび事の玉づさに。
〔おいとしや母様もこなたの事がき遣で。

〔兄新八は侍じや頓而敵を討ふとの。お嬉し

〔さうな文ていに。けふは敵を討たとの。
〔けふは敵を打たとの。

〔嬉 い文を見る事かあすは吉左右きかふか
〔嬉しい便りも有事かあすは吉そふきかふか

〔と。うかへまつてくらしたる。
〔と。くよへあんじわずらふてついにおはて

〔なされしといもとの浮橋が方よりしらせしを

〔聞よりかなしさやるかたなくされ共こなたを

〔月日の
〔たよりにし二大道様へぐわんをかけ月日の

〔手前 が恥 かしいおやの目がねがちがふた
〔てまへがはづかしや親 のめがねがちがふた

〔か。こなたに天まが入かわつたか。
〔か。こなたに天まが入かわつたか。

〔あさましの兄様と。身もだへなげゝは新八も。
〔あさましの兄様と。身もだへなげゝは新八も。

〔扱は母にはしなれたか。エ、残りおふや残念

〔おつる泪をおしのごい。
〔やとおつる泪をおしのごい。いよへかたき

〔がましてきた。

(ウ)『新百人一首』における「第一」切の末(プロット番号⑧)の新八が若君を左京の進に預けて別れ行く場面で、『傾情山姥都歳玉』においては別れの後に次のような巻物の一件が加えられている。

〔『新百人一首』
『傾情山姥都歳玉』

〔おさらは。さらば。いざへと式礼もく礼
おさらば さらば わさへと式礼もく礼

〔いんぎんに。武道の別れ兄弟の別れは死出の
ゐんぎんに。武道の別れ道も二つに別れ行。

〔別れにて。主従此身の別れ路は又こそめぐり
然所へ伴内は侍引ぐし。とつと欠付こりや

〔あふ坂の。関の岩門とうへへ。かつし
左京のうろたへ者。其方向程あがいても家を

〔へとふみならし。忠義の駒に孝行のむち
納る巻物は。伴内がてににぎつた是をみよと

〔打あてゝかけ出る涙の海は西海道。すぐなる
指出す。左京くつへへと吹出し扱々

〔道は東海道。とつちもこつちも誠有。
いかい大ばか門。夫を誠の巻物と大事に存て

〔持たるか。誠御家ヲ納る巻物は。コリヤ爰に有

〔とみせければ。伴内大きにぎやうてんし。

〔とかく左京めのかすなと皆一同にどつと

〔よる。左京さはかす面白い。サアこい。へ

〔と大手を上。取付者を取てなげなげ欠へ

〔人つぶて。指物大勢たまりかね皆々どつと

〔逃うせけれ。今は是迄是よりも敵をしづめ

〔殿様お御代に出さすわ又ふたゝび。此国の

〔地はふましと。ちかいおかためふみかため。

〔ふんだる土やあらかねの。武士の金てつ

〔そなはつてつよきを破りこはきをわり。

〔
武士の武士成。
敵をくだくものゝふの武士のぶし也

〔武士の道とは人々。かんしあいける
武士の道とは人々。かんしあいける

(エ)『新百人一首』においては「第三」切に「高富丹下住居の段」(プロット番号(4))があるが、『傾情山姥都歳玉』ではこの段は「第五」におかれ、「第三」切には「山めぐりの段」がおかれている。

(オ)『傾情山姥都歳玉』「第四」には『新百人一首』にはない「廓の段」がおかれている。

(カ)『傾情山姥都歳玉』「第五」の「高富丹下住居の段」の末尾には、以下のような『新百人一首』にはない親の敵討ちと皆々再会の場面がある。

…袖の白露振分てくがぢ乍も袖の海。深くそ泪せきあへずことはの下より親丹下うんと。一こへ一期にて。六十四才の浮世の夢。終にむなしく也にけり。一人はあはてすがり付。はつと斗に伏しつむものゝ

『傾情山姥都歳玉』考（名和）

哀の手本也。然所へふ平太は。約束の姫受取らんと。丹下が縁に入来る。よも太郎顔お上ヤレ嬉しや己をこそと待つていた。かんせんの親の敵。のがさしやらしと姫君を後にかこい。ヤ心社たかはす共め。臣の誠の刃。受てみよと飛でかゝれば。ふ平太こらへかねそりやのかめしなと打てかゝる。心へたりと切結ふは三重あやうかりけるふ平太取てかへし。姫君をひつ立んとする所へ。よも太郎欠付片先より。こぶしもくたけと切付たり。のつけにかへすとゝめを指。兩人顔のみ合て悦びあふ社道り也かゝる折節。国平は人々の御供して。親丹下が庵りへと尋来る。互にみるよりいたき付。是は々と斗也。よも太郎人々に打向ひ。何として是へは来り給ふぞ。左京聞て云は某。山路にふみ迷ひふしきに山姥に逢は返刀也。殿雲井様にも相奉り。扱丹下其方此所に住居致候事くはしくきく又姫君様にも廻りあふ嬉しやと。皆々居に逢にけり左京兄弟いさみ出。サア是からすぐに御帰国有。悪人伴歳親子共。かうへをはねて御家納め申さんと人々を先に立。心竊に行空の雲の家のものゝふと云もおろかなよも太郎。けふ頼有る世の中は身をすて社うかむ瀬もありその海のふかき縁。千代もへぬべし兄弟のまことのべきぞたのもしき…

(キ) 『新百人一首』の「第四」にあたる部分(プロット番号⑩～⑮)が『傾情山姥都歳玉』にはない。

(ク) 『新百人一首』では「第五」、『傾情山姥都歳玉』では「第六」にあたる最終段においては、冒頭の語句は同じであるものの、あとはまったく異なっており、『新百人一首』には「歌の巻」が、『傾情山姥都歳玉』には「かみ置のだん」がそれぞれ末尾に置かれている。

5. 各相違点に対する考察

次に(ア)～(ク)の相違点について、考察を加える。

(ア)～(ク)のなかで、『新百人一首』にあるものを『傾情山姥都歳玉』がそっくり削除した部分は、(ア)と(キ)の二カ所である。

(ア)は、『都歳玉』という外題が示す通り、上演が正月であったと考えられることから、秋の季節を表す「菊合せ」の節事は不相当と判断したためであろう。

(キ)については、阿弥陀池での了海和尚の施米や役者の名の当込みがあることから、そのまま使うことはできなかったのであろう。あるいは、「第四」の廓の段と類似した場面が重複するのを避けるため、護摩壇が廓に早替りし、再び護摩壇に戻るという夢幻仕立ての舞台演出を意図的にはずしたのかもしれない。

(イ)(ウ)は、大筋にはかかわらないが問題を孕む細部の異同である。

(イ)において『新百人一首』では「第一」の切で金山が若君を産んで死んだという唐突な設定になっていて、まだ妊娠中の序との間に時間的な断絶があるのに対し、『傾情山姥都歳玉』では序に金山の出産までが描かれているので、序と切のつながりがよい印象を受ける。また、『傾情山姥都歳玉』だけに言及のある金山の妹浮橋について、『傾情山姥都歳玉』独自の本文「第四」廓の段で妹浮橋が活躍するのは自然な展開であるが、『新百人一首』にしかない「第四」小倉山草庵の段において、金山に生き写しの島原の傾城浮橋という人物が登場する(プロット番号⑫)のは、偶然であろうか。『新百人一首』の島原の傾城浮橋をヒントに辰松幸助が金山の妹浮橋を設定したとも考えられるが、これについては『新百人一首』成立の問題とからめてあとから触れたいと思う。

(ウ)は『傾情山姥都歳玉』独自の本文で、家を納める巻物が出てくるのだが、これは、やはり独自の本文である「第四」廓の段において「みのゝ国高嶋の家と申は。定家卿の末葉として。代々かてんの巻物を以て。哥を詠み高位にまぢはり又同シ寸方鏡二尊有内には小くら山の哥を定か卿。直筆に遊ばせしを其まゝにほり付。一めんは上の句也家伝の巻物ニツ鏡此三つもつて代々家の重宝とす」とあるのに呼応している。家宝については『新百人一首』には出てこないが、巻末に「抑々当家はひさかたの天津こやねの藤原氏。先祖京極かうもん定家の卿は。ためしなき古今不双の和歌のせい。」とあり、春霞雲

井之丞が定家の子孫であるという設定は同じである。『新百人一首』は、この定家の子孫であるという設定が巻末の「歌の巻」にしか生きておらず、そのために『新百人一首』という外題そのものが作品内容を反映しないものになっている。そして逆に、定家と関連づける必然性のない『傾情山姥都歳玉』において、定家ゆかりの家宝が小道具に使われているのも問題である。これについてもあとで触れたいと思う。

また（ウ）の部分で描かれているのは左京のめざましい活躍である。左京は春霞雲井之丞の重臣でありながら、『新百人一首』ではその活躍がほとんど描かれない。しかし『傾情山姥都歳玉』では、（ウ）の部分と「第三」切の「山めぐりの段」でその活躍が描かれる。

（エ）と（オ）は『傾情山姥都歳玉』だけにある増補部分である。

（エ）の「山めぐりの段」は近松門左衛門作『壺山姥』を利用したものであり、（オ）の黒木売りの趣向は加賀掾の『大原問答（念仏往生記）』第三の「名所づくし」を利用したものである。

（エ）ははじめの部分、（オ）は「名所づくし」の部分、を典拠と並べて記すことにする。

『壺山姥』第四
「信濃国上路の山」
（近松全集第七巻）

一洞むなしき谷のこゑ。
山たかふして海ちかく
谷ふかふして水遠し。前
にはかい水じやうへ
として。月真如の光をか
げ。うしろには嶺松巍
々として風常楽の夢を
やぶる。刑鞭かまくちて
蚩むなしくさる。諫鼓苔
ふかふして。鳥おどろか
ずともいひつべし。心は
むかしに。かはらねども。
一念けしやうの鬼女と
や人はみちのくの。しの
ぶの山に有かとすれば
けふはかひがね木曾の
山。きのふは浅間伊吹山。
ひらやよかはの花ぐも

『傾情山姥都歳玉』
第三 切
「山めぐりの段」

一洞むなしき谷の声。山
たかふして海ちかく雪
ふる空に風二わぎ。行先
もみずふみ迷ふ。せいせ
うかげを落して白雲誰
かともなはん。ともなふ
かげもうは玉も夜るの
無間を。わけかねつ。左
京之進国平は。殿の行衛
を尋んため若君を預ケ
置其身は独行旅はゞき
たみにつもる雪の笠
皆白妙にすいせうの玉
ぬくつのゝびん髭にや
いば乱るゝことく也。
ふゞきに道をふみ迷ひ。
めざすもからぬ山中の
木こりのしほり跡つく

り。雪をになひて。山が
つの。樵路にかよふ花の
かげやすむおもにゝ
かたをかし。月をともな
ふ山路には。雪月花をも
てあそぶ。心はしづの目
にみへぬおにとや人の
いはゞいへ。よしあし
引の山姥が山めぐりす
るぞくるしき。くるゝも
はやき山かげに行くれ
給ひて頼光。道なきかた
にふみまがひ。さとはい
づくと誰にかも東西わ
かず立給ふ。御供の末武
あたりを見廻しゃ。あれ
に柴かる女やすらふか
らは人里もはや遠から
ず。くつきやうのあん内
者是女此山は何と云。ふ
もとのさとへ下るもの
道引せよといひければ。
...

る影を便りにたどり行
それかんこくだけたへ
て積雪脛を埋とかや。我
戦場の太刀刀弓鉄炮も
身にたゝず雪はおろか
氷でも岩でもふらばふ
れ。天地の神もおききや
るべい主君の行へ尋ね
忠義にけづる此からだ
わるゝ口すかぬさつた
らへいそく取てへり
へつれたるばかりと
ふつさいて神のし
よざいを取あぐへいま
して山家の鬼畜の情
しゝでもくまでも鬼神
でも鬼てもしつともご
ざらばおかつたるくそ
ばへべいならとふらみ
ちんふつふじやぎ。たけ
し酒のこもかぶり酒呑
とうじにあらね共血塩
の酒のふつさき肴やた
らほうだら御しやめん
の。若いものゝ名主との
でござらよ。やあ是程
にわめてもいかな狼
でも今に出そむない。あ
らたいくつな事かなと
つぶやきへいる所へ。
一念化生の鬼女とや人
はみちのくの忍ふの山
に有かとすればけふか
ひ峯鈴鹿山。きのふは浅
間伊吹山。ひらやよ川の
花くもり。雪をいたゞく
ぬり足に。柴を荷ひて女
らのせう路にかよふ...

『竹子集』（加賀掾段物集 延宝六年刊）所
収「大原問答 名所」
『傾情山姥都歳玉』第四

「まづ、ひがしにたかく、そびへみへけるは。
先 ひがしにたかく そびへみへけるは。

「わかたつそまの、ひゑいざん、都のふじとも。
我 立 そまの ひゑいざん 都のふじとも。

『傾情山姥都歳玉』考（名和）

〔又は、うゑみぬ。わしのみねとも、名に
〔又は うへみぬ わしのみねとも 名に

〔たき物。おはら木。へ、かはひへ。
〔たき物。おはら木 へ かはひへ

〔たかし。そも此山と申は。くわんむ、
〔高 シ そも此山と申は くわんむ

〔くろ木めされよ。しばめさぬか。たき木に
〔黒 木めされよ 柴 めさぬか。たきゝに

〔でんげう、御こゝろを、ひゑいして。
〔伝 教 御心 を ひゑいして。

〔花を。おりそへて。いふにいわれぬ、
〔花を 折そへて

〔御さうそう有しゆへ、ひゑいざんとは申也。
〔御さうへ有シ故 ひゑい山 とは申也。

〔なりふりや。ふりさけみれば。にしきぶねや。
〔

〔もろこしの。天だい四万八千ぢやうの、
〔もろこしの 天だい四方八千丈 の

〔くらま山。ゆきになたかき、ひむろやま。
〔

〔四めいのほらをうつし。一ねん三ぜんの。
〔四めいのほらを写 シ。一念 三千 の。

〔したもえいづる春くれど。山はそのまゝ
〔

〔きをあらはして。三千人のしゆとをおき、
〔きをあらはして。三千人のしゆとを置

〔ましろにて。はなかとみれば。
〔

〔わうじやうの。きもんをまもり。あくまを
〔王城 の。 鬼門。 守 り あくまを

〔こそこのふゞきよの。たにのうぐひす一こゑを。
〔

〔はらふ。くも水は。是くわんおんのしやすい
〔はらふ 雲 水は 是くはん音 のしやすい

〔まつがさきより、二のせつゞきの、いちはら
〔

〔かや。によいがだけより。くろだにのながれ
〔かや。によいかたけより。黒 谷 の流 れ

〔や。おのゝこまちが。もゝとせに。ひととせ
〔

〔は、しろたへに。せいがい水の、けふりたち
〔は 白 妙 に。せいがい水の 煙 リ。立

〔たらぬ、つくもがみ、みだれごゝろや、
〔

〔おぼろの。しみづ立よらば。つま木こる身も
〔おぼろの。し水 立よらば。つま木取 身の

〔くるふらん。ひろふこのみは、なにへぞ、
〔

〔恋。するや、かげは。やせのさと人、せれう
〔恋 するや 影 わ。やせの里 人 せれう

〔いちゐ。かする、まてばしゐ、はしばみ。
〔

〔しづはら。おはらのねしやう。ぢんや
〔しづはら。お原 のねしやう。ちんや

〔かや、大小かんじ、きんかん、まどのむめ。
〔

〔じゃかうは、もたねども、におふてくるは
〔しやかうは もたね共 におふてくるは

〔そのゝもゝ。人まろの、かきほのかき、
〔

〔やまのべのさゝ、さゝぐり、ぐりへ、くり

〔かへす。おとはのたきの。
音 羽の瀧 の。

〔しらいとの。いとほそやかに、ながるれど。
白糸の糸ほそやかに流るれど。

〔ゆふひあさひのうつろひに。きらゝとみゆる、
夕日朝日のうつろいに。きららとみゆる

〔きらくざか、めいしよのかずはおほけれど。
きらゝ坂名所の数はおふけれど。

〔ことのは草のつゆばかり、あらへ御らん
ことのは草の露斗 あらへ御らん

〔候へと、いちへみのこらずおしへしは、
候へと一々残らすおしへしは

〔げにけう 有てぞみへにける
実 けふ。有てそみへにける。

また(ク)において『傾情山姥都歳玉』の「かみ置のだん」は、宇治座の『白髭明神寿命髪置』によっていると思われる。

(エ)(オ)(ク)の舞台の様子は、それぞれ『傾情山姥都歳玉』の挿絵に描かれており、(エ)では山姥と変じた金山の幽霊を辰松幸助が、(オ)では黒木売りに身をやつした金山の幽霊を同じく幸助が、(ク)では五つ人形を辰松八郎兵衛が遣い、いずれも手妻人形の見せ場であったことが知られる。人形遣いが座本であり、その至芸ゆえ御免操の紫の幕まで許された一座であるから、人形遣いの名に「太夫」を冠し、得意とする操りの演目を寄せ集めて評判を得ようとしたのであろう。

6. 辰松幸助と宇治座

さて幸助が採り入れたこれらの演目を見る

と、宇治座との関係が深いのに気がつく。幸助は兄の八郎兵衛とともに江戸に下って辰松座を創設したのだが、それ以前は竹本座や豊竹座を行き来していた兄とは別に、宇治座にいたようである。次に信多純一氏「宇治加賀掾年譜²⁾」より、幸助に関連のある記事を取りあげて並べる。

①宝永元(1704)年 加賀掾七十歳の項に

『薩摩歌』絵入本。山本九兵衛板。加賀掾正本。「大近松全集」挿絵裏の解説に「京二条通正本屋九兵衛版。太夫加賀掾、宇治嘉太夫、伊太夫、甚太夫、及び、おやま大蔵善右衛門、男人形清水三郎五郎、平妻(筆者注：手妻か)人形辰松幸助の名が見えてゐる」とある。

②宝永六(1709)年 加賀掾七十五歳の項に

『天満神明氷の朔日』山本九兵衛板。絵入七行本。大阪府立図書館蔵。
内題は「上 氷の朔日 かちや平兵衛 平野や小かん 近松門左衛門作」とある。題簽は、上郭に天満神明とあり、中央に氷の朔日、下郭に三行にわたつて、「二条通」正本屋」九兵衛とある。脇方簽の中央に、太夫加賀掾、右手に、宇治嘉太夫、宇治伊太夫、宇治甚太夫、左手に、おやま大蔵善右衛門、男人形清水三郎五郎、手つま辰松幸助とある。

③『富松時計草』半紙七行本七十二丁 山本九兵衛刊 天理図書館蔵 (享保年間刊行力)

「出世山姥 頼光道行」同 山めぐりの段」「寿命髪置 ふぢ波道行」

④『白髭明神寿命髪置』七行本。旧古鞞文庫・大東急文庫蔵。山本九兵衛刊。

「旧記拾要集」に、辰松八郎兵衛一座、公方上覧記録があり、享保四年十一月二十五日に「寿命髪置」が上演されている。

①②より幸助は手妻人形を遣っていたことが知られる。注目すべきは③の富松薩摩の段物集『富松時計草』で、これには『姫山姥』の改題と思われる『出世山姥』より「山めぐりの段」が収められ、「かみ置のだん」そのものではない

が「寿命髪置 ふぢ波道行」が収められている。また、ここには挙げていないが『大原問答（念仏往生記）』第三の「名所づくし」も加賀掾の段物集『竹子集』『乱曲揃』『紫竹集』などに収められており、宇治座で好評を得た趣向を巧みに『新百人一首』の筋に採り入れたことがわかる。

さてそうすると、ここにひとつの疑問がわいてくる。かつて宇治座で活躍し、宇治座で好評を博した趣向を積極的に江戸に持ち込もうとする幸助が、なぜ宇治座で上演された、『新百人一首』の先行作であるといわれる『三井寺不動明王豊年護摩』の趣向やプロットを採り入れなかったのかということである。

7. 『三井寺不動明王豊年護摩』と『新百人一首』

『三井寺不動明王豊年護摩』には、書誌的事項の三に掲げた加賀掾の奥書のあるものの他に、三種の同板本の奥書が知られ、その三種いずれにも富松薩摩の名があり、富松薩摩の段物集『薩摩模様 音曲縫小袖』に「豊年護摩 名所づくし」が載ることや、加賀掾在名正本に印記のないことから、富松薩摩が語ったものと考えられている。ところが丁付を見ると板外中央に「不動一」
「ふとう二」…「ふとう四十一」
「こま一」…「こま十七」とあり、その不統一なありようから四十二丁め以降、つまり「こま一」以降が差替えられた可能性がある。そして、その四十二丁め以降に、正徳五年という上演年代推定の根拠となる役者の名の当込みが存するのである。

『三井寺不動明王豊年護摩』と『新百人一首』とを比べてみると、『三井寺不動明王豊年護摩』のほうがやや叙述が詳しい傾向があるものの、ほぼ同文と認められる箇所は上之巻の序・中（『新百人一首』では第一の序・切）、そして中之巻（『新百人一首』では第三の口）である。そして不思議なことに、四十二丁め以降に当る下之巻の口・中（『新百人一首』では第四の口・切）は、ほぼ同内容であるのに同文ではない。

ほぼ同文と認められる上之巻の序・中では、『三井寺不動明王豊年護摩』のほうが叙述が詳しい傾向があることや、うどんそば売りをしていたゆえ「うそ内」と名乗る人物が麺類にちなん

だ洒落で笑いを誘う場面が、『新百人一首』では「種介」という人物になっていて洒落が生きてこないなどの理由から、従来『三井寺不動明王豊年護摩』が原作で『新百人一首』はそれを刈り込んで改作したものと考えられてきた。しかし、本文を比較するとわずかではあるが次のような事例が見つかった。

『三井寺不動明王豊年護摩』
『新百人一首』
『傾情山姥都歳玉』

(A)

いかに身ひんな私也 とてなんぞめんるいか
いかに身貧^{ひん}な私なりとて めんるいか
いかに身ひんな私也 とて めんるいか

なぞの様 に。手討にせふと申さるれ共
などのやうに。手打にせうと申さるゝ。
などのやうに。て打にせうと申さるゝ。

^{地色ハル}いやへあの様なうどんな人には
いやへ うどんな男に
いやへ うどんな男に

かまふていらぬ物と思ひ。きやはんの紐^{ひぼ}
かまふていらぬ物と思ひ。きやはんの紐皮^{ひぼかは}
かまふていらぬ者と思ひ。きやはんの紐皮^{ひぼ}

しめてゐれば 既 に我らを切麦^{きりむぎ}にし。
しめていれは。既 に 切麦にし。
しめていれは。すでに 切麦^{むぎ}にし。

^ウ花鯉 もないそば切の。首引ぬことは
花がつほもないそば切の 首引ぬきとは
花かつほもないそば切の 首引ぬきとは

あつ麦 な なんぼ わざはひが 大根の。
あつ麦 な。なんぼ^{地色中} わさび が 大根の
あつむぎな。なんぼ^{地色中} わさび か 大根の

からみを出しりきまれても こつちには
からみを出し力 まれても。こつちには
からみを出しりきまれても。こつちには

相手にせぬ。こせうこそ願はずと
 相手 せぬ こそせうこそ願はずと。
 相て せぬ こそせうこそ願わずと。

けんどんな気は持ぬ。 是こゝな人。
 けんどんなきはもたぬもの
 けんどんなきはもたぬ物

フシをけへ とぞわらひける。
フシおけへへとぞ笑ひける。
フシおけへへとぞ笑ひける。

(B)

やるかたもなきみづからが心をさつし手に
上やるかたもなきみづからが心をさつし手に
上やるかたもなき水 からが心をさつしてに

かけて。殺してをひて殿様を討給へと
 かけて。ころして後に殿様を討給へと
 かけて。ころして後に殿様を討給へと

申スのは。御恩の冥加につくること。
 申のは。恩の冥加につくる事。
 申のは。恩のめうがにつくる事。

こはそもいか成なれのはてぞとくどき。
 こはそもいか成なれのはてぞとくどき。
 こはそもいか成なれのはてぞとくどき。

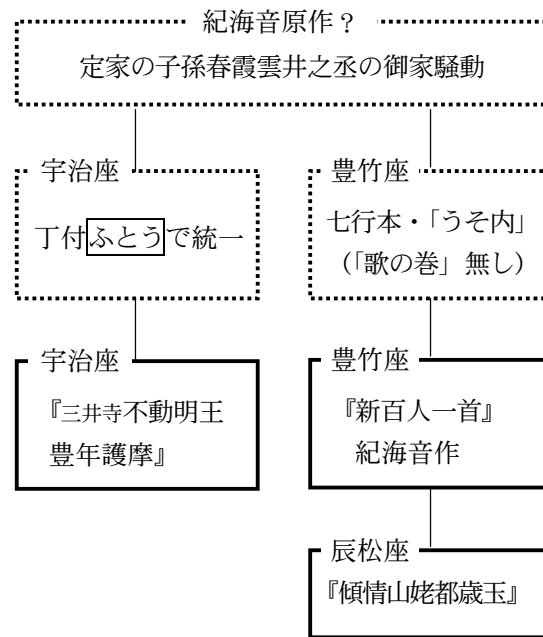
ウこちて 泣いたる。
 かこちて 泣いたる。
 かこちて 泣いたる。

(A)は麵類にちなんだ洒落で笑いを誘うせりふの一部分であるが、ここはすぐ後に「からみを出し」という言葉が来ることから「わさび」のほうが適当で、『三井寺不動明王豊年護摩』の「わざはひが」では意味をなさない。

(B)は金山が兄新八より、お腹の子の父春霞雲井之丞が長年探していた親の敵である聞き、自害しようとして制せられ、わけを話す場面であるが、ここでは「嘆く」という意味の「かこ

ちて」のほうが適当であり、『三井寺不動明王豊年護摩』の「こちて」では意味が通らない。

わずか二例ではあるが、このように『三井寺不動明王豊年護摩』の本文に誤記があり、『新百人一首』の本文の同箇所の方がより適切な事例のあることから、『新百人一首』が『三井寺不動明王豊年護摩』の正本を直接原拠とし改変を加えて成ったものとは考えにくい。むしろ両作に先行する原作があり、それをもとにそれぞれの正本が作られる際に、『三井寺不動明王豊年護摩』の方にだけ誤りが生じたと考えては如何であろう。図示すると次のようになる。



先にも述べた通り、宇治座の『三井寺不動明王豊年護摩』は四十二丁め以降、つまり丁付のこま一以降が差替えられた可能性があり、これに先行する、丁付の表記がふとうで統一された正本の存在が推定される。

また豊竹座の『新百人一首』も、冒頭の「菊合せ」の節事に当たる三丁分のみ六行で、後は七行となっており、その「菊」にあわせて「うどんそば売りのうそ内」という人物を「菊作りの種介」に変更したために、麵類にちなんだ洒落が意味をなさなくなっていることから、六行の三丁分は差替えである可能性がある。豊竹上野少掾の段物集『豊曲常盤餅』(享保十六年五月刊)に「祝儀新百人一首 歌の巻」とあり、「歌

の巻」は祝儀として付け加えられたらしいことから、七行本で「菊合せ」の節事が無く「うそ内」が登場し巻末に「歌の巻」が存在しない先行正本が推定される。祝儀というのはおそらく正徳五(1715)年秋に豊竹若太夫が受領して豊竹上野少掾と称するようになったことを祝うという意味であろう。その折に、以前に語った作に祝儀の装いを施して新しく仕立て直したのが『新百人一首』であったと考えられる。この外題はそうした祝いの意味を込めて冠せられたものであり、先行作は異なる外題であった可能性が高い。

『新百人一首』およびその先行作は『三井寺不動明王豊年護摩』の影響を強く受けている一方で、先述の如く『新百人一首』が『三井寺不動明王豊年護摩』の正本を直接原拠とし改変を加えて成ったものとは考えにくく、むしろ両作に先行する原作として、定家の子孫春霞雲井之丞の御家騒動譚が存在した可能性が考えられる。そしてそれは『新百人一首』の作者紀海音の初期の頃の、いわば習作のような作品であったかもしれない。

そのように考える根拠はこうである。

かつて宇治座で手妻人形を遣っていた辰松幸助は、『傾情山姥都歳玉』において、宇治座の『出世山姥』より「山めぐりの段」を、同じく宇治座の『大原問答(念仏往生記)』より「名所づくし」を、そして又同じく宇治座の『白髭明神寿命髪置』より「かみ置のだん」を採り入れているが、作品の土台としたのは宇治座の『三井寺不動明王豊年護摩』の方ではなく、豊竹座の『新百人一首』の方であった。これは何故であろうか。

江戸辰松座創設間もない享保四年(1719)八月に上演された『八百屋お七江戸紫』の、さがみや与兵衛版九行本の本文末には「作者紀の海音・辰松幸助」の連名があり、享保七年(1722)六月に上演された『半兵衛心中二つ腹帯』の、伊賀屋勘右衛門版八・九・十行本の内題下にも「作者(ママ)記海音 辰松幸介(ママ)」と記されているが、どちらも「紀海音」と正しく表記されていないことから、海音本人の関与があったかは疑わしい。むしろ海音の認容無きまま出版された可能性が高いと推測される。にもかかわらず、あえて微妙な誤表記をしてまで海音の名を出すのはなぜであろうか。

紀海音は浄瑠璃作者としてのみならず、俳諧・狂歌においても活躍し、また契沖の弟子であった関係もあり、多くの江戸の文人たちとの付き合いがあったようである。江戸ではまだ馴染みの薄い辰松座が、旗揚げ間もない時期に作者として幸助と並べて海音の名を挙げるのは、その知名度を利用したかったことも一因ではないだろうか。『傾情山姥都歳玉』の土台に豊竹座の『新百人一首』を用いたのも、豊竹座出身の太夫たちへの配慮も考えられると同時に、やはり紀海音の作であることが大きく影響していると思われる。そして『傾情山姥都歳玉』のほうが『新百人一首』にくらべて筋運びがなめらかであることや、金山の妹浮橋の活躍、重臣左京の存分の活躍、定家ゆかりの家宝が全編を通して効いている点については、矛盾と捉えるのではなく、幸助が海音の初期の頃の原作をも参照したゆえと考えることで説明がつくように思う。

『三井寺不動明王豊年護摩』と『新百人一首』の関係を考えるにあたっては、同様に宇治座と豊竹座で同時期に上演され先後関係が問題となっていた『大和歌五穀色紙』と『小野小町都年玉』が示唆を与えてくれる。この両作の関係については、近年大橋正叔氏の丹念な考証³⁾によって海音の『小野小町都年玉』が先行すると推定されるのであるが、『大和歌五穀色紙』の宇治薩摩等の連名本には作者清水三郎兵衛とあり、海音作と甲乙つけがたいほど巧みな改作がなされていた。人形遣いが本業である清水三郎兵衛の名は『宇治頼政歌道扇』『鞍馬山師弟杉』『傾城今西行』『傾城二河白道』『傾城八重桜』『八幡宮和光白旗』などに作者として記されているが、拠るところのある作品がほとんどであり、オリジナルを一曲作れるほどの力量はなかったと思われる。海音に功ありとした大橋氏の論文はこれを裏付けたかたちである。『三井寺不動明王豊年護摩』の場合、作者は不明であるが、一方の『新百人一首』の奥書に紀海音の名が記されていることを考えると、やはり元々の作は海音ではないかと思われるのである。そして『山榭太夫恋慕湊』を『山榭太夫葎原雀』に作り替えたのと同様の手法で巧みに時事を当て込み、巻末に「歌之巻」を加え、『新百人一首』を作り上げたのではないだろうか。

信多純一氏は「宇治加賀掾年譜」において、「後年、父（筆者注：兄の誤り）辰松八郎兵衛と江戸へ下る幸助が、一座している点に注目される。その正本流通の様相からも豊竹座と関係が深いことを知るのであるが、……両座の交渉は調査される必要がある。」と述べておられる。紀海音が宝永四(1707)年の豊竹座再興の折に座付作者として迎えられたということは、すでにそれ以前に浄瑠璃作者としての修練を積み、オリジナル曲が作れるだけの力量をたくわえ、その力が認められたからにほかならない。いかに文才に恵まれていても、いきなり座付作者にはなれないであろう。若き日の近松が加賀掾のもとで腕を磨いたことは知られているが、海音の場合どうであったのか。ともかく宇治座と豊竹座の関係は、海音の動向とともに、今後明らかにしていかなければならない問題である。

おわりに

辰松幸助の加筆によって成ったと思われる『傾情山姥都歳玉』から大坂の豊竹座、京の宇治座

へと視点を移して考えてみるなかで、原作者が紀海音である可能性を探ってみた。

また考察の過程で行った三本の比較により、近世中期の浄瑠璃界において、一つの作品が京・大坂・江戸の三都でそれぞれどのように改変され、正本が上梓されたか、一例を知る手がかりを得ることができたように思う。

さらなる資料の出現に期待するところである。

注

1. 祐田善雄『浄瑠璃史論考』所収
(中央公論社 昭和50年8月)
2. 横山重『加賀掾段物集』所収
(古典文庫 昭和33年7月)
3. 大橋正叔「紀海音研究ノート(一) — 『小野小町都年玉』と『大和歌五穀色紙』 —」『山辺道』21所収 昭和52年3月

(2003年11月10日論文受理, 2004年1月9日採録
決定 『都市文化研究』編集委員会)

A Study of Keisei-Yamauba-Miyakono-Toshidama

Kuniko NAWA

Keisei-Yamauba-Miyakono-Toshidama is a play that was presented at the Tatsumatsu-za theater in Edo. It can be inferred that Kosuke Tatsumatsu, a puppeteer of the Tatsumatsu-za theater, adapted this play from the *Shin-Hyakunin-Isshu* of Kino Kaion, a playwright belonging to the Toyotake-za theater in Ozaka. In this paper, I study how Kosuke Tatsumatsu did this, and how he changed the play into the Edo style. I also examine the chronological order of Kaion's *Shin-Hyakunin-Isshu* and *Miidera-Fudomyooh-Honengoma*, presented at the Uji-za theater in Kyo, by focusing on how the latter work is said to precede the former. As a result, I discovered the existence of Kaion's original text, which precedes the remaining *Shin-Hyakunin-Isshu* and *Miidera-Fudomyooh-Honengoma*. A comparison of these three texts seems to show us how one Joruri work could be changed differently in the three cities: Kyo, Ozaka and Edo.

Keywords : the Tatsumatsu-za in Edo, the Toyotake-za in Ozaka, the Uji-za in Kyo, Kino Kaion, Kosuke Tatsumatsu